囲碁史録　1

古代中国と囲碁の起源

光井一矢

はじめに

囲碁史会というものがある。文字通り囲碁の歴史を研究する会であり、研究者仲間が集まり自身の研究成果の発表や情報交換を行っている。そこではこれまでの囲碁史の通説が変わったり、これまで不明だったことが出てきたりしている。

囲碁通史というものを作成してみようと以前から考えていた。囲碁通史と呼ばれるものはこれまでにも『坐隠談叢』を代表にいくつかあるが、『坐隠談叢』には間違いもあり、現在では多くの新説がある。囲碁史に関しても通史以外に何人かの研究者が著していて、これらを参考に自分なりに囲碁通史をまとめてみようと考えるに至った。書いていく流れにより或いは通史と言えなくなるかもしれないが、ともかくも囲碁の起源から現代に至るまで書き進めていこうと思う。

本シリーズはこれまでに研究された囲碁史をまとめたものである。明治・大正・昭和には囲碁史に触れた多くの書が出ているが、平成になると以前よりこういった囲碁史の読み物も減ってきたように感じる。そこには囲碁人口の減少や愛好者の需要によるものも関係しているかもしれない。世界の碁が注目され、現在ではＡＩも登場し、未来を見据えている。

そんな中だからこそ囲碁の原点からこれまでの流れに触れてもらいたい。本書を作成している間にも多くの事実が発見されているかもしれず、新たに令和の歴史も進行中である。現代のことで歴史ではないと思われる方がおられるかもしれないが、ＡＩが人間を上回ったことも歴史の一つである。

所属させていただいている囲碁史会では囲碁史を後世に残そうと多くの史料蒐集や研究が行われており、研究者、会員の方々には大いに力になっていただいた。特に本書をはじめ、これ以降も何度も名前が登場するが囲碁史研究家であり、囲碁史料蒐集家である南雄司氏には多大な協力をいただいており、この場を借りて感謝を申し上げたい。他にも各項ごとに意見を参考にさせていただいたり、資料のご提供をいただいた研究家の方々も本文中でご紹介させていただいているが、合わせて感謝の意を表したい。

本シリーズにより少しでも皆さまに囲碁史について興味を持っていただければ幸いである。また、後世の研究者の一助になればこれも幸いである。

光井　一矢

【目次】

古代中国と囲碁の起源
（1）　起源伝説　6
（2）　囲碁は何の道具であったか　27
（3）　碁盤の大きさの変遷　52
（4）　孔子と孟子の時代　76
（5）　棋と弈　84
普及の漢時代
（1）　漢の皇帝と囲碁　107
（2）　囲碁の理論書　112
三国志演義に見る囲碁　123
（1）　魏　124
（2）　蜀　132
（3）　呉　140

普及と浸透の時代　149
（1）　晋の時代　158
（2）　南北時代　166
（3）　中国古代の伝説　178
（4）　囲碁の別称について　181
参考文献　183
第1巻あとがき

古代中国と囲碁の起源

（1）起源伝説

囲碁は古代中国に誕生した知的ゲームであり、長い歴史の間に多くの人に愛好され普及してきた。早くから日本や朝鮮半島にも渡来し、それぞれ独自の発達をとげ、現在ではこれらの国を中心に世界的に広がっている。

そんな囲碁の起源については古くから中国の堯帝あるいは舜帝によって創られたという起源伝説が有名である。堯・舜の両帝ともに紀元前二〇〇〇年よりも前の伝説の帝である。

司馬遷が『史記』の編纂に際して参考にしたとされる書に『世本』というものがある。戦国時代（晋が分裂した前五世紀から秦が中国を統一する前二二一年までの期間）に編まれたもので「堯造囲棊、丹朱善之」という句が出てくる。「堯が囲碁を造り、丹朱はこれを善くす」と読む。これが囲碁の起源に触れた最も古い記録とされている。

堯は中国神話に登場する伝説の帝で、儒家により神聖視され聖人と崇められている。『史記』によれば、「その仁は天のごとく、その知は神のごとく」などと最大級の賛辞で描かれている。丹朱

は堯の子で、『史記』には「堯は退位に際して、帝位の継承者を群臣にはかったところ丹朱を挙げる声もあったが、堯は丹朱を不肖の息子として舜に帝位を譲った」と記されている。

堯は後継者について臣下に推薦者を挙げさせたが、息子という意見は退けた。そして、みなが挙げる虞舜（舜）が、性質がよくない父と母、弟に囲まれながら、彼らが悪に陥らないよう導いているという話に興味を示し二人の娘を舜に嫁している。

舜は母を早くに亡くして継母と連子と父親と暮らしていたが、父親達は連子に後を継がせるために隙あらば舜を殺そうと狙っていた。舜はそんな父親に対しても孝を尽くしたので、名声が高まり堯の元にもうわさが届いたのである。堯は舜の人格を見極めるために、娘の娥皇と女英の二人を舜に降嫁させたところ、舜の影響によりこの娘達も非常に篤実となった。また舜の周りには自然と人が集まり、舜が居る所は三年で都会になるほどだった。そんな中でも舜の家族達は相変わらず舜の命を狙い、舜に屋根の修理を言いつけた後に下で火をたいて舜を焼き殺そうとしたが、舜は二つの傘を鳥の羽のようにして逃れている。それでも諦めずに井戸さらいを言いつけ、その上から土を放り込んで生き埋めにしようとしたが、舜は横穴を掘って脱出した。この様な事をされていながら舜は相変わらず父に対して孝を尽くしていた。

この事で舜が気に入った堯は舜を登用し天下を摂政させている。そうすると朝廷から悪人を追い出し百官が良く治まった。そして民と官吏を三年間治めさせたところ、功績が著しかったため舜に譲位することにした。舜は固辞したが強いて天子の政を行なわせ、堯は二十年後に完全に政

治を引退し、八年経った頃に崩御した。天下の百姓は父母を失ったように悲しみ、三年間音楽を奏でなかったといわれ、三年の喪があけてから、舜は丹朱を天子に擁立しようとしたが、諸侯も民も舜のもとに来て政治を求めたので、やむなく舜が即位した。

以上が堯舜の禅譲伝説である。

日本の国譲り神話もそうであるが、この伝承（神話というべきか）はどうであろう。歴史というのは後世の為政者が創り出すものであるということをよく聞く。そのまま信用してよいかは不明である。これも舜が力により前の堯を斃し政権を奪ったが、人望のあった堯から譲られたとすることで国を治めてきた可能性もある。しかしこの禅譲伝説は中国では神聖視され、特に儒教では理想とされているため、先に述べたような反対意見もあるが、そんなことを言おうものならどんなことになるか。中国史としても触れてはならない部分かもしれない。それは日本の国譲り神話と同じことである。現代でこそ歴史的検証や考察といったことができるが、少し前の時代に、譲られたのではない、武力で奪ったのだ、などと言えばどんな目に遭うか考えればわかっていただけるだろう。

話を囲碁史へと進めていこう。

囲碁は堯が不肖の息子丹朱を教え導くために創造したのが始まりという伝承が起源伝説の中心となっている。

堯　肖像

中国では堯の創始伝説が信奉されており、これによって囲碁論が構築されてきた。しかし、近年中国では囲碁史研究が盛んになり、この創始伝説は単なる伝承に過ぎないという意見が出るようになったものの、これに代わる有力な起源説は出てきていない。

また、三世紀後半に張華のまとめた『博物志』に「堯造囲棊教丹朱、或云、舜以子商均愚、故作囲棊以教之」と出てくる。「堯が囲碁を造って子の丹朱に教えた」というのは語り継がれてきた事だが、それに続けて「或いは、舜は子の商均が愚かなるをもって、故に囲碁を作り教えた」となっている。

堯・舜ともに伝説の聖王で、堯が息子にではなく民心が集まっている舜に帝位を禅譲したことは儒家に信奉されており、儒教の理想とされている。また、同じく舜も帝位を禹という王に禅譲するが、禹が開いた夏の最後の王である桀の臣の烏曽という人物が囲碁を創ったという説もある。

いずれにしても中国古代黄河文明の宮廷の中で生まれたというものである。

堯・舜の禅譲は司馬遷の『史記』にあることだが、囲碁の創始伝説については触れられていない。司馬遷が『史記』を完成させたのは漢武帝の頃、紀元前九十一年のことで、そのころすでに囲碁は普及しており、『史記』の中にも登場してくる。それであるのに堯・舜の創始伝説に触れていないということは、この頃はまだ伝説が浸透していなかったということか。

この堯による囲碁創始伝説には反対意見も昔から存在する。九世紀、唐の詩人・皮日休である。皮日休は著書である『原弈』に堯の創始伝説について述べている。

> 弈の起源をある人に問うに、その人のいうには、堯丹朱に征の道を教え、丹朱がつくった。それが疑いのないところであり、碁の道は、かくも古いのだ、と。
>
> （碁の技は人を詐かるものという条、中略）
>
> さらに試みに論じてみるに、そもそも堯に仁義礼智信が備わっているのは、おのずからなる性なのであって、（中略）
>
> どうして区区たる繊謀小智を出して、術策を弄し、勝負を争うことがあろうか。堯の世で、三苗が服さなかった。堯の仁に対するこの苗のあなどりは、堯が兵を起して慴伏させようとすれば、

猟師がみみずくを殺し、漁師が魚の卵を煮るぐらいの簡単さでことはすんだであろう。しかし、堯は兵をさしむけることなく、その処置を舜に委ね、舜もまた征伐するに忍びず、これに敷くに文徳をもってし、こうして苗は帰伏した。苗のあなどりに対してすら、兵を加えなかった。どうして害詐の心、争偽の智を戦いの法として其の子に教え、それをもって国を伐たせるようなことがあろうか。

とすれば、弈が始めておこったのは、必ずや戦国時代に害詐争偽の道があらわれてからであり、きっと縦横家の類がおこしたものに違いない。どうして堯ということがあろうか。

『原弈』（皮日休著、東洋文庫『玄々碁経集』訳文）

弈は囲碁の別称。

訳文が載っている『玄々碁経集』は一三四七年に晏天章と厳徳甫が囲碁の手筋、妙手や詰碁をまとめたもので、日本でも東洋文庫や山海堂などで復刻、訳され、囲碁の古典の一つとして現在でもプロ棋士やプロを目指す人達、また、アマチュアでも上達を目指す人の教材となっている。『玄々碁経集』については後に詳しく述べることとする。

皮日休は聖帝である堯や舜が、「あんな争いごとを考案するはずがなく、戦国時代に害詐争偽の道があらわれてから造られたに違いない。堯や舜が息子に害詐の心や争偽の智を教えるなどとい